

元NBA解説者

嶋田 淳氏 (高校22期)



立高でボールを追いかけた日々

何故か涙は出ない。しかし、体が震えて止まらない。これで自分の青春は終わったのだと思った。受験の心配も、恋話も、全ての事が無意味のように感じた。山梨県甲府市のとある県立高校の体育館、「準優勝、立川高校！」の声に壇上前に進み出て行った。頭の中が真っ白でどういう顔で賞状を受け取ったのか記憶がない。

バスケットをこの日の為に続けてきた訳ではないが、最後の集大成のつもりだった。2年前新入部員の噂は、立高始まって以来の大型チーム、私はフォワードで、身長は181センチ、当時のスタメンの平均身長は180.5センチ。何しろデカイ奴が多かった。多少天狗になっていたかもしれない。中大付属高校以外では、関東高校とは良く競り合ったが、我々の代になってからは、三多摩地区では殆ど負けなかった。

高校3年の春、関東大会予選は順調に進んだ。秋山先生直伝のゾーンプレスが面白いように決まった。ベスト4戦では、三商か、明大中野か、記憶が定かではないが、大敗して負けた。しかし、4年ぶりの関東大会が決まった。単純に嬉しかった。背が大きかったから、とかでは無く、自分では1年の夏の合宿、一番きつかった2年生の夏の合宿を精一杯乗り切った結果としての証が嬉しかった。

あの時もう一度チームの仲間や後輩達と想いを一つにしてインターハイ予選に臨んでいたら、間違いなく広島に行けたと思う。

関東大会、対関東高校とのベスト8戦、それが最後の試合となった。何故か力が集中しなかった。どうしても4点差が返せない。彼等も宿敵立高に対して必死だった。戦績は断然立高が上位で、負ける気がしなかったが、どうしても逆転出来ない状態が続いた。残り数分はどちらも譲らなかった。そして最後のホイッスルが鳴った。関東大会の表彰式では空ろな状態で終わったが、今回は何故か冷めた感覚が残った。何故なんだ、どうして負けたのか、一度燃焼した後の燃えカスは二度と燃えないのか？

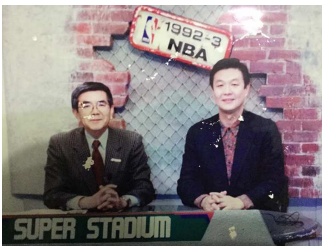
そして、私の立高バスケット部は終わった。確かにバスケットばかりやって、全国大会までの夢を見たが、本当に燃焼し尽くしたと言えば嘘になる。

だからこそ今でも「悔い」として胸に残っている。仲間はあまり語らないが、自分では不完全燃焼で終わった高校生活を、どこかで回収して人生の辻褄を合わせようとして来たかもしれない。



関東大会 (高校22～23期)

NBAの解説



バスケットに親しんだお陰で、人には出来ない経験もあった。仕事でアメリカに駐在した時(1987～1991年)、仕事相手のアメリカ人とバスケットの話を始めると、初対面の相手でも直ぐに和んで、俺はNBAのどのチームが好きだとか、NCAAではどのファンだとか、話が弾み大いに助けられた。オフィスがN.Y.にありマジソンスクエアガーデンにはニックスの試合をシーズンチケットまで購入して通った。お抱えの運転手(実は飲んで帰る時のお馴染みの運転手だが)の紹介でN.Y.のサマーキャンプにも行った。NBA選手と知り合えた事は一番の思い出の一つである。一時ヒューストン・ロケッツでプレイしていたマリオ・エリー選手とは食事をする仲になった。

日本に帰国のとき、当時では日本人で最もNBAの事を知っているのは私以外いないとさえ思っていた。NHKではNBAの試合をBS放送で放映しており、かなりNBAファンも増えていた。帰国に際して私はその放送を楽しみにしていた。しかし放映を見た途端その番組の解説者の話には驚いた。まさに見てきたような嘘を並べていた印象があった。あまりのいい加減さに憤りを感じ、とうとうNHKに投書をしたところ、半年後に職場に連絡があった。

「嶋田さんに解説をお願い出来ないか」と、あるNHKプロデューサーからの電話であった。テレビの前では批判や非難ばかり言っていたが、いざ向こう側に行くとなると多少は逡巡したが、これもバスケットに親しんだ縁だと割り切って出演の返事をした。中々思う通り解説が出来なかったが、足掛け4年間(1992～1995年)

ゲスト解説者としてバスケットへの想いの丈を精一杯伝えたつもりだ。職場でもアフターファイブでも大いに話のネタになり、日本でもお客先との融和に役に立った。解説者仲間の、日本人で初めてNBAのドラフトに掛かった、228センチの岡山君(住友金属)とは今でも賀状を交わす友人となった。バスケット関係で交友の範囲が広がり、仕事の場面で異色な経歴が役に立った。

今、感謝

古い記憶を辿りながら筆を進めてみたが、思いの外、バスケットの恩恵はこれまでの人生で、色々な場面で役に立っていた。中学の担任がバスケットの顧問で、否応がなく入部させられ、立高では疑いもなくバスケットに入部し、大学時代はバスケットと麻雀に明け暮れ、社会人となり実は家内は会社のバスケットの仲間、後悔の念などとてもない、思いっきり謳歌していただろう。「未燃焼」で「不完全燃焼」で終わった高校生活と思っていたが、なんと素晴らしいバスケット人生だったと思う。中学の先生、秋山先生、多くの先輩や後輩、全ての人達に感謝したい。

そして半生を振り返り思うこと、後輩に伝えたいこと

なんと短い3年間だったか、そして素晴らしい密度の濃い時間だったか！悔いは必ず残っている。想いが山のように募るけど、熱い時間を過ごした自分に良くやっさと褒めてやりたい。バスケットでも勉強でもクラブ活動でも音楽でも、あの密度の濃い時代で燃焼する事が一番大事だったと半世紀隔ても思うことは同じだ。立高生活は私には珠玉の時間であった。そしてその証が素晴らしい友人を持てた事である。年老いて語る青春の蹉跎を恒例の同期会でしみじみ語り合いながら立高の素晴らしさに感謝している。

我が後輩の皆さんに告げたい。人生の数パーセントの時間でも必ずや素晴らしい密度の濃い熱い時があることを忘れないでほしい。